わたしの原風景 15

竹下文子
たけした　ふみこ／童話作家

イラスト／平澤朋子

生まれたのは九州の港町。海峡を見おろす坂の上の家に、父と母、祖母と叔母も一緒に暮らしていた。でもその家の記憶はない。

二歳半のとき、父の転勤で神戸に引っ越した。そしてまもなく弟が生まれた。それまでは、母、祖母、叔母の三人の誰かがいつもそばにいて面倒をみてくれていた。それが一変し、女手は若い母ひとりだけになった。その母も赤ん坊にかかりっきりだ。いきなり「もう大きいでしょ、おねえちゃんでしょ」と言われる立場になった。

２ＤＫのアパートで、ベビーベッドを置く場所がなく、母は柳行李（やなぎこうり）に紐をくくりつけて鴨居からぶらさげ、ゆりかご代わりにして、まだ首のすわらない赤ん坊を寝かせていた。

そのゆりかごが、単純にうらやましかった。だけど、もう大きいから、ゆりかごでは寝られない。おねえちゃんだから、お母さんのお手伝いをしなくちゃいけない。

母の手つきを真似て、ゆりかごをそっと押す。前に後ろに、ゆらゆら。もっと押すと、もっと揺れる。もっと。もっと。もっと。

台所から母があわててとんできた。ゆりかごはぶんぶん大揺れに揺れて転覆寸前、中の赤ん坊は、かわいそうに泣き声も出ずにぷるぷる震えていたそうだ。

「そんなに揺らしたいんなら、お外へ行って、ぶらんこでも揺らしてなさい！」

叱られて、階段を降りて外に出た。よく晴れた真昼。アパートの共用の遊び場には誰もいない。こまかい花崗岩（かこうがん）混じりの砂が白く光って眩しかった。

ぶらんこを押すと、かすかにきしんで揺れ、やがて止まる。

違う、これじゃない、と思う。ぶらんこじゃない。揺らしたかったんじゃない。そうじゃなくて……。

うまく伝えることのできないもどかしさを抱えて、ぶらんこの前に立っていた。貝が真珠を抱くように、いまでもそれを持っている。